

経皮吸収型製剤の適正使用に貢献した例

プレアボイドとは薬学的ケアから患者の不利益（副作用、相互作用、治療効果不十分など）を回避あるいは軽減した事例を意味します。今回は、経皮吸収型製剤の減量方法等に関して情報提供を行い、適正使用に貢献できたプレアボイドを紹介いたします。

患者背景

▶原疾患の治療目的で入院された患者

【持参薬（一部抜粋）】

ハルロピテープ 24mg 1 回 1 枚、24 時間ごとに貼付

入院後より減量の方針となり、

ハルロピテープ 24mg について、1 回 0.5 枚で貼付するように指示が入った。

※ハルロピテープとして販売されている薬剤は、8mg、16mg、24mg、32mg、40mg の 5 規格



C さん

ハルロピテープが減量になっているが、0.5 枚で貼付する指示が出ている。添付文書に減量が必要な場合は漸減するように記載されているが、具体的な漸減方法の記載はない。
0.5 枚で貼付した情報があるかも含めて、製薬企業に確認しよう。

製薬企業に確認後

C さんのハルロピテープについて相談があります。
ハルロピテープ 24mg を 0.5 枚で貼付する指示が出ております。
製薬企業に確認したところ、ハルロピテープを切断したり、半面のみ貼付した際のデータはなく、承認された用法でないため推奨しないとのことでした。
また、減量時に漸減が必要な薬剤ですが、漸減方法に規定はないようです。参考情報として、臨床試験では 1 日ごとに 8mg ずつ減量した事例があるとのことでした。
ハルロピテープ 16mg への変更はいかがでしょうか。



医師



薬剤師

確認ありがとうございます。ハルロピテープ 16mg に変更します。

その後、ハルロピテープ 16mg、1 回 1 枚に処方変更となった。
また、その 2 日後にはハルロピテープ 8mg、1 回 1 枚に変更となった。
減量に関連する有害事象の発現なく経過し、8mg で継続して退院となった。
経皮吸収型製剤の減量方法等に関して情報提供を行い、適正使用に貢献できた。

参考文献：添付文書、メーカー回答

関連する DI ニュースとして、以下を発行しております。

- DI ニュース 2023 年 4 月 2 号
投与中止時に漸減が必要な当院採用の薬剤
- DI ニュース 2025 年 9 月 1 号
当院採用の経皮吸収型製剤一覧 ver2.0

抗パーキンソン病薬	アーデン ¹ 、アキネトン ¹ 、アジレクト ¹ 、アマンタジン ¹ 、アポカイ ² 、イーシー・ドバル ¹ 、エフビー ¹ 、カバサル ^{1,2} 、コムタン ¹ 、スタレボ ¹ 、デュオド ¹ 、ドバコル ¹ 、ドバストン ¹ 、トレリフ ¹ 、ニュープロバッチ ^{1,2} 、ハルロピテープ ^{1,2} 、ペーロデル ^{1,2} 、ピシフロール ^{1,2} 、ピレチア ¹ 、フラニベキゾール ^{1,2} 、バルマックス ^{1,2} 、メネシット ¹ 、レキップ ^{1,2} 等	1:悪性症候群(Syndrome malin)を誘発することがあるため 2:離脱症状等が現れることがあるため
商品名 (薬効分類)	分割使用(テープの切断)について	
ハルロピテープ (パーキンソン治療薬)	1	切断時のデータなく、認められた用法でないため推奨しない ¹⁾ 。